

岩手県立大学社会福祉学部

2025 年度 第 2 回 研究例会

実施日：2025 年 10 月 8 日@社会福祉学部棟 301 講義室

1. 報告者：講師 小畠美穂

報告テーマ：これまでの実践・研究と、これから：「関係性の質」にこだわり続けて

【報告要旨】

私のこれまでの実践と研究について、以下Ⅲ部構成でまとめた。

I 部では、実践のひとつで、青年海外協力隊・ソーシャルワーカー隊員として活動した経験を紹介し、「支援する=支援される」という相互作用・関係性の重要性を示した。II 部は、修士論文でソーシャルワークの「価値」「原理」を追究したテーマについてである。対象は「在権コリアン」の人たちで、ライフストーリーから社会的暴力や生きづらさを抱える人が困難を乗り越える「生の意味」の再構築過程を分析した。結論として、関係性の質に利他的関係性を見出せること、また「懸命に生きる生」そのこと自体に価値があることを論じた。さらに和辻理論を援用し、生の主体性・全体性について論究したことを紹介した。III 部では、医療ソーシャルワーク業務が、マネジメント化し「内向き姿勢」になっている現状を批判し、社会への働きかけを通じてその克服を目指す方法論を探索的に試論した博士論文について紹介した。

全体を通じて、人と人、人と社会の「関係性の質」を探求し、ソーシャルワークの価値を追求する研究課題をもち続けていることを報告した。

2. 報告者：准教授 山田陽平

報告テーマ：記憶を「思い出すこと」と「忘れること」

【報告要旨】

私は、記憶、とくに検索過程（思い出すこと）に焦点をあてた実験心理学研究を行ってきた。記憶するために覚えることを工夫する人は多いが、過去 20 年の testing effect や retrieval practice に関する研究からは、思い出すことが記憶を定着させることが明らかにされている。しかしこのことは一般的にはあまり知られていない。retrieval practice の原則を組み込んだ既製のデジタルフラッシュカード Monoxer を用いて、教員採用試験コンテンツの学習効果を検証した研究（山田・澤入、2024）を紹介した。次に、博士論文で扱った retrieval-induced forgetting (RIF) の研究を紹介した。RIF は検索過程に抑制機能を含むか否かを考える上で重要な心理現象であり、博士論文では再認による RIF を複数の実験で検証したことを報告した。今後の研究としては、再認による RIF を再現・公表すること、けん玉などの技能学習の熟達に関する一人称研究、震災記憶の変容に関する調査を考えている。